

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
2月号

毎月23日発行
通巻378号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷盤
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



瑞光院のかきもち 矢追房子写(文・3頁)

大倭神宮社務所竣工報告祭 および 申孝祭法話より

大倭神宮について (その一)

昭和51年2月23日

法主 矢追 日聖

今日(2月)は二月の月次祭でございますけれども、いつもの月次祭と違って申孝祭というのと重なっております。申孝祭は、大倭神宮に関するお祭りの日で『日本書紀』の中にも出て参ります。もちろんこれは歴史的な立場ではどうかわかりませんが、日本人が少なくとも千二、三百年前まで昔から言い伝えて来たひとつの歴史であります。これは後の時代になって編纂されていきますので、例えば二千年以上前、三千年近い前に、日本の国の場合、律令国家の様な形で、天皇というものがあって、ひとつの組織された国であったかのように書かれていますけれども、事実はそのようではなかったと思うのです。ところが、それを否定する根拠ももちろんありませんし、長年の間言い伝えて来たことでございますので、私もこれを疑うのでなし、信じるでもなし、しかし、そういう言い伝えがあったと。多くの人が長い歳月の間、まがりながらも伝えてきたというのは非常に貴いことだと思います。

言い伝えては、九州の人々の集団がヤマトの方に移動して来たということなのです。それには色々理由があったと思うのですけれども、とにかく四人の兄弟が責任者として、大勢の人々をヤマトの方へ引き連れて来た。けれども、上の兄さん、次男、三男、皆「く」なりました。そして、一番末っ子の残ったところが後の神武天皇ということになるのです。いらないぎこぎこがあったのですが、ヤマトへ出てきて二、三年して、ようやくヤ

マトが落ち着いてきたと思うのです。そして、四年たつた春、新曆にすると二月二十三日、大倭神宮の周辺において神まつりをされた、そういうような言い伝えの日なのです。

この大倭の神の宮というのは、歴史の流れから見ますと、悠久なる太古にさかのぼります。日本の中において、登美の一族がこのお宮をお守りして来たのですが、世の移り変わりによつて、このお宮を矢追一族がお守りしていくような因縁になりました。ちょうど聖徳太子の頃から、矢追の一族が神様のお守役で今日まで伝わつてきておりません。家の言い伝えによれば、ちょうど私で五十代に当たります。矢追という呼び名ができて五十代でございますが、神武天皇がヤマトへ移つて来たというそれ以前における、ここはヤマトの中心であつたわけです。

とにかく言い伝えでは、ニギハヤヒの命という神さんが天降つてきて、それからその子孫の者が代々生駒山を中心としたこの周辺におられました。中でも神まつりの場というものは、古い時代は生駒の山の上であつたと思います。

話は変わりますが、何万年前には、大和の広湖（ヒロミ）というのは湖でした。そのもうひとつ以前は、大阪湾から淀川にかけて、ずっと大和の中央まで海が入つておりました。入り海だったのです。それが地殻の変動によつて現在の奈良坂、奈良の方が隆起してきて、大和の方が海の水ではなく淡水湖、湖に変わりました。湖になった時代。それから、その水が大和川の所から河内の方にぬけて、今は堺の海に入つていきますけれども、あれは徳川時代に作った川ですから、昔は龍田の方から河内の方に入つて、河内という所は、網の目のようにいろいろな川があつたそうです。そして、生駒山

の西の麓、ずっと枚方の方まで、今でいう淀川ですね、淀川の方までいつている川だとか、河内というところは、川がたくさんあつたのです。此の間、大阪城へ文化行事（第六二回文化行事、昭和五十一年二月十五日）で参りましたが、あそこは、その中でも一番下が固くて高い場所だったのですね。仁徳天皇が都されたと言ひ伝えがありますが、けれども、いわゆる難波高津の宮と言ひますが、あの辺にあつたのではないかと思ひます。それから、孝徳天皇とか、聖武天皇とか皆あちらに都されたのです。現在の大阪城、あるいは放送局のあるあの周辺なのですね。また、あの周辺には縄文式の土器とかも出ているところを見ると、かなり古い時代から人がいたはずなのです。

話を戻しますと、神まつりの場というものは、古い時代は生駒の山であつたと思ひますけれども、だんだんと耕作することを覚えた時代、稲を植えて、その収穫によつて同じ場所に定住して生活できるという農耕の時代になつてきた。登美谷のこの辺は、地形から見ても、大和の盆地が湖から、だんだんと丘になつてきて、だいたい海拔七十メートル位の所が古代ヤマトの陸地になつていたと思ひます。この頃、この辺は、南が開けて、大和の広湖を眼下に見下ろす、農耕とすれば一番適当な場所でありました。種さえ蒔けば生えてくるという原始的な農耕でも、下に湿気があるのでやけませんし、水稲にはいい場所でした。大和の広湖から見ると、この辺がちょうど丘の上になつていて、南向きの谷で、普通の家で言えば、ここがちょうど戌亥の隅になります。

そしてまた、ちょうど対角線になるところに三輪の山があります。登美と三輪とは相対して、真ん中に湖がある。名前も登美と三輪でなんか言

葉も似ているような気がしますが……。

そういうような位置で、大倭神宮を中心としたあの周辺が、その当時の神まつりの中心の場所であつたと、そういうような言い伝えがあります。

現在流で言えば、天皇陛下のおられるところが都ということになるのですけど、神武天皇がヤマトに来られた頃、ヤマトの神まつりの中心はこの登美谷でした。そして、この辺は長曾根の邑という名前だつたらしい。それから、金の鴫が出たということ、鴫の邑に変わつて、後に鳥見（登美）という『日本書紀』には説明してあります。どちらにしましても、この登美谷、富雄川のこの谷筋にはその当時の神まつりの中心があつた。今で言えば政治の中心とか、権力者のいた中心とかそういうことなのですが、その当時は神まつりをすると、一番中心であつたのです。

それから、いろいろないきごきがあつて、金の鴫が出たとかそういうことがあつて、結局、ヤマトの神まつりをされてきた長曾根一族が新しく出て来た九州の人々にすべてを譲つたという形になるのです。けれども、九州から来た人達は、神まつりはヤマトの中心の北の方には来ないで、南の城の麓、今の御所市柏原のあの付近で神まつりをしたのです。それを後の人がご即位の式を挙げたとか、いわゆるそれが一代の天皇とかいうような形で書いていますけれども、決してそうではないのです。それは後の人がそう決めただけのことなのです。ヤマトで又みんなが定着するの、そこで神まつりをしたというだけなのです。

もし、戦によつて、武力によつて、九州の人達が勝つていたならば、その当時のヤマトの神まつりの中心である、登美（鳥見）のこちらの方へ出て来て、ここでお祭りするのが順序なのです。けれども、武力においては九州の人達は劣つていた、

ヤマトの方が強かった、と。それで、神まつりも南の御所の柏原のあの付近でしたのです。
『日本書紀』とか見ますと、三年間はまだヤマトもおさまらないでというようなことが書いてありますが、二年も三年も経つてようやくヤマトの人達と九州の人達が和解できたと思います。

それで、神武天皇達がヤマトへ来て四年目の春、新暦の二月二十三日、その日を期して、元のヤマトのお祭りの中心の場、大倭神宮の周辺において、神武天皇達がこへ出て来てお祭りをされた。ヤマトに元からいた人達、三輪さん、ご先祖さん、ヤマトの地の神さん、その神さん達に対して感謝のお祭りをされた。そういうような言い伝えがあります。それを「鳥見山中霊時」というような記録があります。

今日の二月二十三日、申孝祭というのは申す孝行と書くのですが、『日本書紀』には、「大孝を申べ給う」と書いてあります。それで、申孝祭という名前を使っています。

日本の国の古代の社会を見た時に、ここはそういうような意味において、重要な位置にあると同時に、初めて近畿地方、ヤマトの人達と、九州の人達がここにおいて手を結んだ。その手を結ぶ仲介の労を取ってくれたのが、金の鶏の発祥だと。だから、金の鶏というのは、和の光だと、私は説明しています。

歴史としては荒唐無稽な話かもしれないけれども、そうした先祖から、古い時代から言い伝えて来た話の内容というものには非常にありがたいと思います。現在も、お互いに一応は仇(かたき)のような形で戦争しても、干戈(かんか)を交えても、済んでしまえば仲良くしていくというようなことが、日本の創建当時の言い伝えの中に含まれているということは非常にありがたいと思います。(続く)

あじさいアルバム ③

表紙写真について 杉本 順一

この写真はある程度の年輩の方ならなつかしい光景かもしれません。

瑞光院でも、法主様は毎年寒い頃になると鈴月かあさんと二人で、大きなのし餅を薄く切り、一枚一枚ワラやひもで結びながら、寝室の天井に吊るすのを楽しんでおられました。

天井が板でなく篠竹で作られているのは、この須加宮の地に第一歩をしるされた草創期の生活を忘れないためだと法主様から伺ったことがあります。



▲平成3年6月 瑞光院の茶の間にて撮影者は昇ちゃん。多分、こんな会話が……。
法主「おまえ、ちょっと後ろを向いたつたらどうや」
房子「いや！」(とは言え写真を提供してくれました)
写真提供：矢追房子さん

このシリーズに写真をご提供くださる方を探しています。

昭和59年(奈良県でわかさ国体が開催された年)10月26日夜、奈良ホテルにおいて皇太子・美智子妃(当時)両殿下臨席のもと、第20回身体障害者入ボーツ大会懇親パーティが催され、法主様も菅原園園長として参加。その折の「コマガ、奈良日日新聞の二ユースで掲載されました。法主様は、「殿下と12月23日の誕生日が一緒ですねん」というような話をされた由。



▲写真提供：青山日元さん

こもれる魂魄の地をたずねて(七) 楠木 正成 正行親子

”青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ木の下陰に駒とめて……”

湊川の死地に赴く正成が涙をこらえ、わが子正行をさとし、千早赤阪村に帰郷させるといふ、父子の今生の別れを歌ったものです。

正成・正行は南北朝の戦乱期、「太平記」に登場する人物であり、後醍醐天皇・後村上天皇と親子二代で忠臣として仕え、傷つき斃れてしまいました。

畿内には、楠木氏に関する魂魄の地は多く点在しますが、その中的一部分ではありますが、今回も私が訪ねた地をご紹介します。

まずは、楠木の誕生地、千早赤阪村、1331年(元弘元年)「赤坂城」や「千早城」を中心にゲリラ戦にて北条幕府を苦しめた所として有名です。私が訪れた時は赤坂城・千早城は待つていたかのように晴天で3月の暖かい日でした。最初に菊水の旗を上げた「赤坂城址」は軽く登れました



が、「千早城址」は何千段もの階段を登って行き、当時よろよになりながら行った事を思い出します。島本町にある「楠公父子訣別之所」(乃木希典書)は、昔、桜井宿と呼ばれた交通の要所です。右に行けば湊川、左に行けば故郷千早赤阪

村、今生の別れをする父子の銅像もあり、その気持ちを思うと、何かもの悲しい所でもあります。(写真①)

兵庫の会下山には、700名たらずで陣を張った、「大楠公湊川陣之遺跡」(東郷平八郎書)があります。討ち死にするのは最少限で良いと考えたのでしょうか。足利軍は3万5千、味方は新田軍と併せて1万1千でありました。多勢に無勢、この会下山より足利軍めがけて突入して行きました。こうして湊川の戦いは終わりをむかえます。

湊川神社には、弟である楠木正季と刺し違えたという正成戦没地と墓碑(写真②)があり、この時有名な「七生まで同じ人間界に生まれて朝敵を滅ぼそうと願う」と正季が言った「七生報国」が生まれ、六百年後の太平洋戦争での勤王主義の標語となります。

正成の首は足利尊氏が故郷の千早村に届けさせています。その首塚が河内長野市の観心寺と羽曳野市の杜本神社にあり、二つの首塚が存在します。父、正成が討ち死にしてから十二年後、正行は

南朝の旗のものと、足利軍を撃破していきなす。小楠公義戦之跡碑」が



南朝の旗のものと、足利軍を撃破していきなす。小楠公義戦之跡碑」が

天満橋松阪屋北側にあり、正行は敵味方の区別なく、川で溺れる兵士を救ったと言われています。この正行の温情に打たれ、多数の足利軍が楠木軍に帰順し、後の四條畷で共に散っています。

東大阪市の往生院には「楠木正行公四條繩手合戦本陣跡碑」「楠木正行公墓」「正行公銅像」があります。また、四條畷市にある正行を祀る「四條畷神社」「贈従三位楠正行朝臣之墓」、飯盛山上にある「楠木正行銅像」。数多くのこれら史跡を尋ねると、23歳という若さで戦死した正行の悲哀を感じ、郷里で残される母の事を考えると寂しくもあり

最後に京都の嵯峨野に寶篋院というお寺があります。秋にはもみじでにぎわう、このお寺には、二つの墓碑が並んでいます(写真③)。一方は足利二代將軍義詮のお墓で、もう一方の墓碑が小楠公、楠木正行公の首塚です。故あってこの寶篋院に葬られたとのことです。義詮は遺言を残し、正行公の近くに自分を眠らせてほしいと語ったとのことで、足利氏と楠木氏の敵対する両者の墓が、同一地域に築かれるという、珍しい事が起こっています。



返らじと かねて思へば 梓弓 楠木 正行 なき数にいる 名をぞととむる (兼田 隆)

そこが常寂光土 ～ 一念三千の世界 ～

再録 昭和39年11月『大倭新聞』第4号より

原田 禹 雄

心打たれた文がある。ここに（※2月16日の日蓮上人の誕生した日にちなみ）その37年ぶりの再掲載がかなった事を謝し、喜びたい。私の好きな、そして大切にしている趣味の一つに、古い『大倭新聞』『すさのお』『おおよまと』紙を読む事がある。そこには法主さんの話をはじめとする様々な方々の、様々な出来事がキラ星の如く掲載されていて、読み進めれば心楽しく、ありがたく、そして思わず嬉しくなってしまう。そんな折、ここに紹介させていただいた原田禹雄氏（※当時邑久光明園医師）の一文に出会う事ができた。

それは昨年、国がハンセン病者の隔離政策の過ちを認める少し前の春の事であった。無論私は氏がどの様な方かも知知上げないし、氏が関っておられるライの実情にも疎いが、私は氏の文の何に心打たれたのか。一言では言い難いものがあるのだが、その一つに氏の日蓮上人を慕われる思いの深さがある。世に日蓮上人を師と仰ぎ、その教義を宗とする宗旨、宗派は数多くある。その数の多さには驚かないが、上人亡き後、八百年にして、いまだここに一人、上人を慕い、その赤裸々な心情を吐露される人のあるのは、心動かされるものがある。世に言う「信仰者」なるものが、どの様な方を指して言うのか私には皆目わからないが、あるいは一方、氏の如き方こそが真の「信仰者」ではと心秘かに思うのだ。

二〇〇一年九月十日、一陣の台風が紀州伊勢から房総半島小湊あたりを通過して行った。その夕刻、大阪北浜の暗雲の空に架った二重の虹が美しかった。これ日蓮上人起つの予兆か。翌日米同時多発テロで世界に激震は走るのだが。

(京都府八幡市 林 修三)

幼い日々

……前 略……

私は、京都の日蓮宗の寺で生まれ、寺で育った。みずから悩み求めて日蓮聖人を識ったのでも、絶望の底から唯一の光として法華経をつかんだのでもない。光明園の日蓮宗立正会の会堂で僧籍をもつゆえに、同信の人々より高い座を占め、講壇の高みから人々に経を説き、日蓮聖人の遺言を講じているが、これは大きなあやまりであろうと、ひそかにおそれている。立正会の会員の殆どは日蓮宗の家で生まれたのではない。らいを病み、苦しみ、求めて、法華経を得たのである。本来、教えを受けるべき人々に、私は何を教え何を説こうとこののであるうか。私には、つねにこうした、にがい反省がつきまとっている。私のおごつた言葉のゆえに、会堂から去り、日蓮宗を離脱した人もあった。

幼い日々、私は毎朝、父の膝に坐って、朝の勤行のあいだ本堂にいた。金色に荘厳された暗い本堂で、私は夢のような世界をあそんでいた。本尊とその周辺は、神秘的超越したナニモノがあった。父の読経の声は、本尊に吸収されており、そして、本尊の方から、まるでゴダマのようにお経が聞こえてくると思われた。私は、幼い心は恐怖を感じた。しかし、その暗い金色の須弥壇の中で、ただひとつ、あざやかで私に畏れをいだかせなかったものがあつた。「オソツサン」と私たちがよびならわしてきた日蓮聖人の像であつた。「オソツサン」は、幼い日々の私にとって、英雄であつた。折本や紙芝居で、くりかえし、多くの奇蹟をあらわす人で、その人の前には、権力も色あせた。すこし大きくなった私は、小山泰堂の『日蓮大士

真実伝』の変態仮名をたどりながら、その美しい七五調に酔った。しかし、小学校へゆくようになってからは、いわゆる「合理性をめざす教育」のために、畏れと夢の世界から遠ざかっていったようである。

私の体験

現在の寺院生活に、清らかなものがないとはいわれないが、しかし多くの矛盾やギマンもまたないといきれない。どのような清規にしても、正しい教説にしても、組織ができ、経済力が要求された場合、そこにすでに墮落の芽が生じていよう。私が、日蓮宗教師資格を得たのも、医師となつたのも、その動機は清らかではない。

僧侶になつたのは、家が寺であつたためである。在家に生まれ、その家を捨てて、日蓮聖人の門下として得度をした人の方が、どれだけ真実であるか知れない。寺に生まれ寺に育ち、ずるずると慣習的に僧侶となつた私自身を思うと、自分の勇気のなさを恥じるばかりである。

医師となつたのも、医学を修め、人のため世のために、などと思つたからではない。終戦に近い日々、兄はすべて軍隊にとられた上、寺には母と病気の妹がいるだけであつた。私自身が志望する文学を選べば、兵隊にとられることはわかつている。私は、寺と母と病気の妹のために、徴兵延期のある医学を選んだ。そして、医学をすこし学んだとき、終戦をむかえた。寺と母と妹はのこつた。兄も帰ってきた。私には、もはや医学をつづける理由はなかつた。医学によって、財産も地位も名誉も得まい、などと、自分が医学をつづける上に、何かもつともらしい理屈をつけて、まがりなりにも医師になつたのも、或いはその底には生活苦を

おそれたからであつたのかも知れない。私は自分の志す文学を、寺も生活もすてて獲得することができなかつた。そして、私は、自分の医学をすて、僧侶に徹することもできなかつた。まるで、自分のこれらの二エキレナサの申訳のように、らい病学を専攻したが、そしてまた、らい病学を専攻することによつて、ある人々から賞讃されはしたが、どうであつたらうか。らい病学を専攻する人がきわめて稀であるというただそれだけの理由から、私にあまりにも多くの恩恵が与えられたのであつた。私は、インターンがすむと誰よりも早く大学の助手になり、給料をもらつた。友人がアルバイトをしながら、自費で研究しているのに、私は研究室で一室を与えられ、大学の経費で研究した。友人が菌をくいしばつて、いい研究業績をあげているなかで、私はのんびりとして怠りがちであつた。私は、あまりにもめぐまれすぎていたようである。

永遠の真理と生命

京都大学のらいの研究室は、すばらしい雰囲気であつた。西占先生と小川先生は、実に敬虔で、しかも熱心なクリスチャンであり当時の今板先生は鋭い反宗教論者であつた。そうした中で、私のあやふやな仏教信仰は、たたかれ、みがかれたといつていい。これらのすぐれた科学者の中では、単にムード的な宗教論や信仰は何の役にもたたなかつた。また、日蓮宗教学だけの唯我独尊的な立場もみとめられるわけもなかつた。生半可な僧侶としての私は、ここで徹底的に論破され、傷つけられていた。そして、私は、そうしたなかから、あらためて、日蓮聖人によつて示された「久遠実成」という事実によつて開かれた「一念三千」の

世界に目が開けていったのである。「永遠の生命の存在を知つたとき、すべての現象はそのまま実在となる」というこの日蓮聖人の教えが、クリスチャンと反宗教論の人とによつて開眼されたというのには、あるいい方をすれば皮肉である。だが、私自身は、ここに深い大きな意義を感じざるを得ないのだ。

「永遠の真理であり生命であるもの」によつて、自己の住む世界が常寂光土であり、自己もまた仏であることができる、という、きわめて明快な日蓮上人の教えが、私のその後の生活を樂天的なものにしてしまった。実際、法華経の世界の美しさと偉大さはなにもものにもかえがたい。らいの療養所へ赴任して、私はこの美しさにうたれている。多くの矛盾をふくみながらも、私の住む世界は、完全である。私が、時には、全くいやになり、腹だたく、口惜しく思ういろいろな出来事も、それは私にとつて、のりこえるべきごとと思われる。島（※邑久光明園のある、瀬戸内海の長島）から逃げだしたくなる理由は、つまりは、それ故にこそ私がとどまらねばならぬ理由なのであるとさとることができ。ありがたいことである。

編集者（※故柴地則之さん）が、私に原稿を求めたのは、きつと、「らい病学専攻の医者で、日蓮宗僧侶である」という特異性のためかも知れない。しかし、残念ながら、私はこのような凡俗な人間で、医師としても、僧侶としても、きわめて勇氣に乏しい者でしかない。何かユニークな見解を示すこともできなければ、別にすぐれた研究もあるわけでもない。邑久光明園というらい療養所で、人並の俸給をもらい、官舎を与えられ、人並に働いているだけなのである。つましさに欠けているため、時々でしやばつて、言わずもがなのこと言つてのけるために、他の立派な医師の方

々よりも、すこし目ざわりになるのだが、こうした目ざわりのなオッチョコチョイのために、編集者につかまつたのであろう。

深敬の世界

らいの世界で、日蓮聖人の教えを烈々として持ちつづけている人は、しかし、日本に実在する。身延深敬園の園長、綱脇龍妙殿下その人（※明治9年福岡生まれ、昭和45年没95歳）である。九十歳になんたんとするその老軀に、いまでも日蓮聖人の教えが脈々として相承され、らいに対する大きい慈愛があふれている。綱脇龍妙上人の生涯を紹介する資格は、私にはない。法華クラブから出版されている雑誌に、綱脇上人御自身が自伝を連載しておられるので、それをお読み下さることをねがっている。

「深敬」の名は、法華経の常不軽菩薩品第二十による。過去の世に、仏の教えがみだれた国があつた。ひとりの比丘びくがいて、経も読まずに、ひたすらにゆきあう人を礼拝した。「私は深くあなたを敬います。あなたは仏になる方だからです」と、その比丘は言った。人々は、その比丘を、あざけり、ののしつて、時には石をなげさえた。比丘は、逃げ去つても、遠くよりそれらの人を礼拝した。人たちは、その比丘に「常不軽」というアダ名をつけた。僧侶たちも、常不軽が不遜にも成仏を約束するものとして敵視した。常不軽は、ながくこの行をおこない、仏となつた。そして、常不軽ののしり、打つたものたちは、そのことを機縁として、仏への種子が与えられていたというのである。

若い日の綱脇上人は、この「深敬」の行こそ、日本を救うものであるとかたく信じて、日本の政

治家をうごかし、「常不軽」を国是とする運動をはじめため、身延へゆかれた。上人は、日蓮聖人の廟へ祈念をこめられた。こうした日々、上人の眼をとらえたのは、山門附近のらい患者であった。患者の苦しみをみるにつけて、これらの患者に手をさしのべたかった。しかし、一方、少数の患者のためよりも大きな仕事で、日本を救う仕事があるのだと、上人は自分の心にいきかせられた。身延を去る日、患者たちの並んでいる前で、上人は別れの言葉をかけられた。しかし、足はうごかなかった。

上人は、みずから、このとき涙が出てきて、長い時間、男泣きに泣きましたと私にきかされた。それは、遠い明治の時代のある一日に流された涙であった。しかし、今日もなお、その涙によってできた深敬園を、私が実在するものとして見ることのできるのには、大きな幸せであるとともに、それは、日蓮聖人が私に与えた奇蹟であると思われる。常不軽の「常」という字に、私は、深い意義をおぼえる。つねに行うことの困難さは、なまけ者の私には、知りすぎるほど知っていることなのである。持続することの困難さとその意義こそ、実は、日蓮聖人が、身をもって私に示されたものであった。

宗教は無力ならず

私たち日蓮聖祖門下の仕事は、この地上に、常寂光土を現前させることであるとも言うことができる。現世利益ばかりを追求してあくことを知らぬ人々や、宗教に対してははじめから何の理解も示さぬ人々がありにも多い今日、私たちの宗教はあまりにも無力であるように見える。「信ずるために知るのではなく、知るために信じなければなら

ない」という無合理性は、合理的教育をうけた人たちにとつては非合理としかうつらぬらしい。人々が教会を忘れ去った今日でも、なお教会は人々のために祈つていられることを言った西欧の人の歎きは、私たちの歎きでもあろう。とるにたらぬ小さい利得を信仰の所産として、我慾の満足のためだけに祈り、みずから日蓮聖人の正流となえる人々も多い。だが、日蓮聖人の教示は、いまも生きつづけ、私たちに常寂光土のありかを知らしめている。いま、このの、私のいる場所なのであって、それ以外のどこでもない。逃げるために祈るのではなく、得るために祈るのではなく、失うために祈るのでもない。日蓮聖人の祈りも、私の小さい祈りも、永遠の真理と生命にむかうとき、ひとつのものとなる。そのとき、すでに私は常寂光土にいる。私は、ただそれだけしか知らない。私にとつては、だから、宗教は無力ではない。私には、本山も寺も必要ではない。祈る場所はどこでもよい。そこが常寂光土である。

島のこゝろ

夜の長島を歩く私に、光明園の灯がみえるとき、私はこんなことを思う。光明園のあの灯は、まるで空の星のコダマであるかのようにだ。この光明園ができてからも、ここに住むらしい患者も職員もずいぶんかわつたであろう。これからもかわつてゆくであろう。大風子油(※らしいの治療に使われた)時代の悲惨な時代もあった。スルフォン剤の導入によって、らいは治る時代となった。治った人もまだ治っていない人もいる。男も女もいる。愛憎もある。慾もあれば無私もあろう。時々刻々に、これらの姿はかわつてゆく。だが、星のコダマのようなこれらの灯をみると、光明園はらいにそな

えられたものであることがわかる。自棄になろうと、怠惰であろうと、どうしようと、光明園はらいのために備えられている。らいを病む人の安らうことのできる場所なのである。いくらあらがおうと、そうなのである。どのようにクソミソに言われても、光明園はらいのためにあるのだ。そして、らいをなおそうとするとき、それに手をさしおのべるための人々が用意されているのである。私が、そのひとりとして、光明園にすることは、日々眼前のことごとに、あるいはのしり、あるいは怒り、または笑い、よろこびはしても、かわりないのである。光明園はらいのためにあり、私はらいのためにいるのだ。ともすれば忘れてしまいがちなこのことを、夜は、私にそれを教えてくれるのである。私は常寂光土の一つの姿を、具体的にそこからつかみとるのである。

恐らく、私は編集者の意図に反したことがばかり書いたであろうが、これしか書けないのだ。日蓮聖人の把握の希薄さ、信仰のたよりなき、医師としての未熟さ、その他、すべて責められなければならぬことばかりである。編集者からの依頼を、私は断わるつもりであった。矢追日聖という人物の何であるかも知らず、大倭教というものも私は知らぬ。大倭新聞というものが何を目的にして出版しているのかも知らない。断わる理由はいくらでもあるが、書くべき理由は全然ない。編集部員は、しかし、まことに巧妙であった。らいのこととなると全く目がない、という私の弱点を完全につかみ、それを利用したのであった。従つて私は大倭教とは何の関係もない者であることと、編集部員のひとりだが、かつて光明園に来て私たちからい話をきいた人であるというただそれだけの理由でこれを書いたことを明記しておきたい。

あじつ日記

1月12日 夕方から奈良パークホテルで、邑の各事業の責任者の2ヵ月に1度の交流の場である「邑交会」の新年会が行われました。

1月13日 祝会。舞鶴市の寄山靖治さんは約1年ぶり2回目の参加。新年の心境などを話し合いました。

1月14日 成人の日、西の斎庭で大とんどが行われ、今年も有志によるぜんざいや大根炊きが頂けました。この日は妙月かあさんがお嫁入りの時持参したという屏風なども火に上げておられました。

1月15日 大倭神宮月次祭。
1月18日 大倭殖産(株)とその関係業者さん達で安全祈願祭が午前10時より大本宮拝殿で行

大倭会等268回文化行司 大阪歴史博物館と難波宮跡へ

昨秋新設された大阪歴史博物館を見学し、その後難波宮跡を訪ね早春の一日を楽しむ。

日時：平成14年3月17日(日)13:30集合
場所：大阪歴史博物館 入り口ホール
交通：近鉄西大寺駅12:32発・学園前12:37発難波行き快速急行に乗り、上本町下車(13:02着)。

地下鉄谷町線に乗り換え谷町4丁目下車、9番出口からすぐ。
ルート：大阪歴史博物館・難波宮跡

注意：雨天決行
昼食は済ませて集合して下さい
車の場合は駐車場あり(有料)

世話人 湯浅芳郎
TEL 0742-48-3389



2月9日 法主婦幽祭。祭典後

1月18日 正月帰省者も帰園して皆顔を揃えて、午前(年男・年女の紹介)、昼食会、午後(喫茶とカラオケ大会)と一日がかりの新年会を楽しみました。
(須加宮寮)
1月12日 麦わら帽子と長靴で邑内をよく散歩していた「福ちゃん」こと福本義憲さんが帰幽されました。71歳でした。
2月1日 昭和31年の開苑当初から入苑、46年間生活されてき

た宇野哲央さんが帰幽されました。71歳でした。
(長曾根寮)
1月16日 3階フロアで定例懇談会。食事のことで盛り上がり、人間やはり食べるということが肝心のだと感じました。
(八重垣園)
2月3日 節分で、いわし、福豆他の行事食を頂き、午後は大正琴、ハーモニカ、キーボードの出しもので楽しみました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
3月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。
*大倭会主催第四〇〇回祝会
3月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
*月次祭(大倭神宮)
3月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

編集後記

*月次祭(大本宮)
3月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
1月号の特集「私の暮らしに生きる法主様のことば」について、よかった、もっと続けてほしいと何人もの方から聞きました。1月号には間に合わせられなかった方も、又、どなたでも、いつでも是非是非、原稿をお寄せ下さい。

編集部

われました。
1月19日 交流の家では夜、F IWCの定例委員会があり、2回目の中国キャンプの計画などについて話し合われました。

1月23日 大倭大本宮月次祭。この日は祭典後、九州朝日放送制作の「砂漠に緑をく緑の父・杉山龍丸の軌跡」(平成10年11月23日全国放送)のビデオを上映しました。

1月27日 紫陽花邑に、大倭殖産(株)の矢追明孝さん(矢追美壽紀さん次男)の一家4人が戻ることになり、この日新居の上棟式が行われました。

祭典中の「ユクスエ タノモシ」という法主様の言葉が強く心に残りました。(P)
2月3日 大本宮拝殿にて玉緒祭が開かれ、この日は平成7年の玉緒祭でのご法話の録音を聞きました。(同年3月号『おお

やまと』に「ことだまのまつり」という題で掲載)
2月4日 1月22日突然電話を頂いてから、この日午後、熊本県蘇陽町の幣立神宮の春木伸哉宮司が、大阪市森之宮の「かささぎもりのみや」の石崎正明宮司と一緒に来邑されました。幣立神宮については法主様が『ながそねの息吹』中の「大倭神宮伝承の紀」(314頁)でいわゆる神武天皇ら九州勢の故地がその辺りであると書いておられます。

教務本庁や大倭神宮社務所で、また双葉館のお世話で夕食を共にしながら歓談して夜の9時半頃帰られました。(P)
2月6日 大倭神宮月次祭。
夜、大倭会館で、邑の各事業を担っている大倭育ちの人達の月に1度の交流の場である「邑倭の会」が行われました。

平成元年に瑞光院の茶の間で、本紙編集部が法主様に取材したものの記事になっていないという録音テープの一部を聞かせてもらいました。その後は拜殿のあちこちに遠来のあるいは久しぶりの出会いと交流の輪ができていました。

2月10日 祝会。帰幽祭後1泊してという方もあり21人の参加者。千葉市の角田ゆかりさんは初参加。前日のテープを約2時間、全部聞かせて頂く。笑いながらの座談の中で説かれる法主様の言葉は、それぞれの胸に響くところが多かったようです。(テープ起こしをして頂ける方があれば編集部まで、一報下さい。これこそ「写経」です！)

大倭安宿苑では
1月29日 奈良市立富雄南中学2年生の18名が、須加宮寮と長曾根寮で1日体験学習を行いました。

(菅原園)